

視点(1905)

(流通経済編)

I Saw All America (その274) !!

— アメリカ経済と資本主義経済の終焉？ (その1) —

資本主義経済は18世紀半ばの産業革命(大量生産・大量販売・大量消費の循環サイクルに基づく経済システム)から始まり、基軸となる経済は「産業経済(モノづくりに起因する経済)」でした。しかし、世界の先進国(アメリカ、西欧・中欧、日本)ではモノ離れ現象が起こり、モノづくりに起因する産業経済は希薄化して金融経済(カネの動きに起因する経済)へと進み、今や先進国は低経済成長かつ超金融緩和経済となっています。

世界の経済の覇権国家であるアメリカにおける産業経済の段階から今日の金融経済の段階までのプロセスは次の通りです。

<第1ステップ> 産業経済下でのドルの基軸化への時代

1944年のブレントンウッズ協定によってポンドからドルへ基軸通貨が移行し、アメリカのドルは自国の経済のみならず世界の貿易の決済に必要な貨幣量を発行していました。基軸貨幣の国家は必然的に産業経済だけでなく、金融経済の要素を色濃く持つこととなります。ドルは金によって保証され、金の保有価値以上のドルの発行はできませんでした。

<第2ステップ> ニクソンショックによるドルの脱・金本位制以降の時代

1971年8月にアメリカはニクソン政権下でドルと金の交換制度(金本位制)を廃止し、金の保有価値とは関係なくドルの発行が自由となりました。この背景には、アメリカ経済がベトナム戦争(1960~1975年)により疲弊していたこと、また1970年にモノ離れが起こり低成長経済に突入したことがありました。ニクソンショック以降のアメリカは、世界の基軸貨幣であるドルを経済成長以上のスピードで発行(印刷)しました。

そのため、アメリカの経済は1970年代及び1980年代には不景気下の物価高であるスタグフレーション経済となり、名目経済は成長しました。1982年に就任したレーガン大統領(1980~1988年)はレーガノミクス¹の経済政策により、当時、日本経済に押されていたアメリカ経済を円高政策・規制緩和・知的所有権の保護等によって再生の基盤をつくりました。

<第3ステップ> 金融経済とICT産業の融合による経済発展の時代

レーガノミクスによるイノベーション(技術革新)により、アメリカは1980年代後半からICT(情報通信技術)の新産業が萌芽していました。1993年頃からICT産業と金融産業が融合してIPO(新規株式公開)による経済が発展し、やがてバブル経済化して2000年にいわゆるICTバブルが崩壊しました。しかし、1993年から2000年までの7年間は、アメリカの経済を再生させました。ICT時代はまさに、クリントン政権(1992~2000年)でした。

<第4ステップ> 金融経済と不動産産業の融合による経済発展の時代

ICTバブルの崩壊後、ブッシュ政権は経済を牽引する新しい産業として不動産産業(住宅産業)を選び、アメリカ国民への住宅政策によって低所得層にも住宅を持てるようにしました。これが後のサブプライムローン問題となったのです。不動産産業と金融産業が融合して金融派生商品(デリバティブ商品)が生まれ、これもやがてバブル化して2007年のサブプライムローン問題、2008年のリーマンショック(リーマンブラザーズの破綻、バンクオブアメリカによるメリルリンチ救済併合、アメリカ最大の保険会社AIGの経営危機による一部国営化…等)が起こり、2009年のヨーロッパ金融危機へと続いてバブルは崩壊しました。まさに不動産時代はブッシュ政権(2000~2008年)でした。

以上のようにアメリカ経済は、最初は世界の基軸貨幣としてのドルによる金融経済の道を歩み始め、その後、金本位制を廃止してドル貨幣を経済規模以上に発行する脱・産業経済による金融経済へと進み、さらに新しい産業(ICT産業と不動産産業)を育成して金融業と融合した経済を創出し、バブル化・バブル崩壊、またバブル化・バブル崩壊を繰り返しつつアメリカ経済を発展させてきました。

(流通とSC・私の視点 1906へ続く)

(株)ダイナミックマーケティング社⁺⁶

代表 六 車 秀 之